

幼稚園園歌ものがたり (下)

葛原しげる

4、神戸市楠幼稚園々歌

私が、この作歌にかゝる前に、園長先生から示された案としては、すでに、歌の形式をそなへたものがあつた。曰く

一、春は櫻の咲きにほひ

秋は紅葉ば 散りしく

みんなのすきな 幼稚園

たのしい 楠幼稚園

二、積木遊びに砂遊び

戦争ごっこに おまへとて

.....
.....
(みんな仲よしの)

三、楠公様へおまいりし

大倉山で 遊びませう

.....
.....
(みんな元氣な)

さすがに、語調は、ミ、のつてゐる。そして、園の徽章が、印象鮮明なる

菊水三二葉

であることも、作りよいものであつたのであるが、原案第一節に合せて、第二節、第三節をも、するにしても、園のモットーである

「みんな仲よく」

「みんな元氣よく」

の入れどころにも困るので、各節に入れようとし、原案第二節の、遊戯の類も分けて、

さくら もみぢ に よいお庭

唱歌も 遊戯も 面白い

皆の桶幼稚園

皆仲よし 元氣よし

雨の降る日も 風の日も

楽しいお話 お辨當

皆の桶幼稚園

皆仲よし 元氣よし

まして見たが、これではあまりに月並で、氣がさすので、

一、春は さくらの咲くお庭

秋は 紅葉の散る お庭

みんなの楠幼稚園

みんな 仲よく 元氣よく

に對して、形式を調べて

二、夏は 積木に 砂遊び

冬も 戦争ごっこ おまへごっこ

みんなの楠幼稚園

みんな 仲よく 元氣よく

さし、更に、第三節には、此の幼稚園の徽章が日本一である事、第四節で、楠公さんや、大倉山を出して、特色づけ、しかも、形式としては、「起、承、轉、結」の法に従つて見たところ、幼児の歌謠としての長さに制限を考へてゐる私が、ズレンマに陥る事になる上、第二節にも、季節を出して、春夏秋冬を並べることは、善くもあり、悪くもあるので、考へ直してゐるさ、園長の方から、

「實は、幼稚園には、遊戯の他に、おはなしを尊重してゐる。ブランコも、皆大好きで……」

「このおはなしが出たので、早速、

『積木、おはなし、砂遊び、

唱歌、戦争ごっこ、おまじない、

何でも 楽しい幼稚園

みんな 仲よく 元氣よく』

さもして見た。ところが、これは、如何にも、名詞の羅列に過ぎなくて、まづいごも夥しいし、四節からの長さになるのに、それこそ、轉換もなく、各節とも、同じ、「みんな仲よく、元氣よく」の反復が、飽き易い幼児にまつては、慘酷なので、大英斷をして、この第二節は、カットしてしまつて、

楠幼稚園にのみ限つた内容こそ、

楠幼稚園々歌には、なるのだ。

さばかり、みえをきつたわけで、次の様にしてしまつた。するさ、此の第二節になつた

『帽子の二葉き菊水は

日本一の きしやうです』

が、ひきく、目立つて来て、園長先生も、大よろこび。しかし、二葉なら故障はないけれど、菊水が、「毎日のびてはふさりては」は、をかしいさ友人が笑ふのであつたが、しかし、各節とも、第二行目で、切れてゐるのである事を答へて、安心させた事である。それにしても、幼児に

毎日のびては ふさりては

忠義さ 孝行 いたしませう

こ、忠孝を説く事に、又、批評がありさうであるが、既述した所もあるまほり、讀書百遍すれば、その意が自ら通するまじく、「三つ児の魂百までも」である。雪白の幼児の心に、理窟なしに、泌み込ましておきたい色彩の多い中に、日本人は、何ごしても、千萬年後までも、忠孝一途、世界に比なき君臣父子の情の濃かな點こそは、強く、深く、信念となるまでに、幼少の時から、只々、言葉の上だけでなくでもよいから、

「忠義を 孝行 いたしませう」

を、口ずさましても、泌み込ましておきたいものではないか。佛教の一派には、ある句は、口にするだけでも、救はれるまじくへ説いてあるではないか。

さて、三節の中、第一節にだけ、

『みんなの楠幼稚園

みんな 仲よく 元氣よく』

がないのであるが、第一節を、第三節にはあつて、形式からいつても、却つて、美しくもあるまじく、宇治の鳳凰堂の建築式である。凸字形にしても、凹字形にしても、中央にだけ特異性を具へさせておくまじくは、よいのである。

第三節の冒頭「いつもは、困る。幼稚園から、いつも出かけてばかりゐては、困る。まあらば、「今日も」にしようか。それも、度々で困るなら、「今日は」にしようか。「今日は、お天気もよいし、する分、久しく、参らなかつたから、登らなかつたから、さア、——」促がす事にしては如何。

まじく、さる人の説がある。

「都會地の幼児は、なるべく、度々、毎日でも、日光にあて、風にあて、そして、實社會の種々相にも、心しては、

觸れさせたい。しかも、これは、日本の誇りもしてゐる楠公さんである、程遠くない大倉山である。毎日でも、参らせたく登らせたいのである。しかし、事實は、それが出来ないのである。そして、棒ほご願つて、針ほご叶ふのが人の實相であつて見れば、『いつも』願つて、悪い筈はないではないか。」

三、恐しく、六かしい事になつたけれども、肯んすべき論旨でもあり、園長先生にも、異論はなくて、いよくきまつたものが、これである。

一、春は 櫻の咲くお庭

秋は もみぢの散るお庭

みんなの 楠幼稚園

みんな

仲よく 元氣よく。

二、帽子の 二葉ミ菊水は

日本一の きしやうです。

毎日 のびては ふこりては、

忠義

孝行 いたしませう。

三、いつも まるりませう 登りませう

楠なんかう公こうさまへ 大倉山おほくらやまへ。

みんなの楠くすのき幼稚園こうえん

みんな

仲なよく 元げん氣きよく。

この楠幼稚園の出身者には、同園會さいふのがあつて、時々會合の度毎、皆で、歌ふ爲に、「楠幼稚園同園會の歌」さいふのも出來た。大變よい事である。

ら、東京愛隣幼稚園々歌

この幼稚園のマークは、二葉である。「二葉より香ばしく」、の意味である事は謂ふまでもない。そこで、その二葉さいふものを、何ミかして、幼児向の歌にしようさいふのである。相對的のものにしないではないのである。そこで、その二葉も日のたつにつれて、大きくなるべく、花咲くべく、希望に燃えてゐるのが特徴である。

それを、二つにして、第一節では、

「のちには 大きい〜木

お山や お庭の 大きい木」

ミしかけたのを、只々「大きい木」の反復にはしないで、「りつばな木」ミした。また、花の方も、只、花を咲いたゞけでもよいが、慾はつて、實のらせた。即ち、

「のちには、野山を かざる花

お花の後では りつばな實」

こいふのである。此の「りつばな實」こいふのは、幼児向に、「おいしい實」をもらいたいところ——誰かは、そんな食ひしん棒は止め、こいふ。しかし、幼児にきりては、

1、たべる

2、あそぶ

3、ねむる

の三者は、特權なのである。大人のにいへば、子供の仕事は、此の三つなのである。その第一位にあるのが、實に、「たべる」ことなのである。強調していへば、決して、「食ひしん棒」なきよ、さげすむべき事柄ではないのである。食ふことも、神聖なる幼児の仕事なのである。それを思へば、

「お花の後では おいしい實」

とて、決して非難はないのであるが、第一節の、

「お山やお庭の りつばな木」

に對照した次第である。そこで、

一、かはい、ふた葉、小さな葉

のちには 大きい 大きい木

お山や お庭の りつばな木

二、かはい、ふた葉 小さな葉

のちには 野山を かざる花

お花のあこでは りつばな實

こまこめたが、これでは、あまりに、理科の説明文めき、博物のおさらへになつてしまひさうなので、幼稚園の爲でなくとも、ご更に、おめでたくも、たのしく、

第一節に、

「あかるいお日様 ニーニニ」

第二節に、

「氣もちのよい風 ソーヨソ」

を添へてみた。

この、「あかるいお日様」は、「氣もちのよい風」は、如何にも、おあつらへ向であるが、如何に幼稚園向だからこいひ、歌だからこいつても、不合理があつてはならない。但し、幼児のイリュージョンを、ここまで尊重するかは、殊に、自然界の諸現象に對する幼児のおごろきや、うたがひを、何う誘導し、何う解決するかは、その取扱者の深く考慮しなくてはならない點であるが、童話童話の世界の仕事に没頭してゐる私共不斷の念願は、

幼児と共に おごろき

幼児と共に うたがふ

こころの單純、平明、そのものでありたいことである。而して、宇宙間永劫の眞理は解決し得なくても、その眞理のあ

らはいれを、神秘^{△△}を感じ得る敏感性は有ちたいこそなのである。宇宙間の神秘を感じ得る敏感、それは、幼児の心である。その幼児の心に、かゝる歌謠を以てしても、眞理または神秘を、感ぜしめる萌芽を植ゑつける爲にも、時^ミ、所^ミを超越して、永劫不變のものたる「日」^ミ「風」^ミを配して、その力を、それ^ミなく、感ぜしめる事に、何の非難があらうや。「風」^ミはその意、「空氣に他ならぬ」。かくて、その「日」^ミ「風」^ミを加へたのは、

一、かはいゝ ふた葉^は 小さな葉^は

のちには 大きい大きい木^き

お山^やや お庭^にの りつばな木^き

あかるい お日^ひ様^{さま} ニーココニコ

二、かはいゝ ふた葉^は 小さな葉^は

のちには 野山^{のやま}を かざる花^{はな}

お花^{はな}のあみでは りつばな實^み

氣^きもちのよい風^{かぜ} ソーソソヨ

である。即ち、太陽が、すべての原動力ではあるが、もつと表面的にいつても、太陽の光^ミ熱^ミの賜^ミして、成育があり、又、空氣の賜^ミして、同じ、成育がある。それをさう^ミは謂^ミはないで、「ニーココニコ」や、「ソーソソヨ」の幼児語によつて、童謡化して、氣樂^ミに歌^ミひをほらせようとしたものであることは、いふまでもない。

只、「大きい大きい木」の「大きい」であるが、これは、

「大きな 大きな木」

ミした方が、ふさはしくはなかつたかミ、今の私の不安である。「大きい」の「い」はその音韻が、せまい、くらい、つめたい。けれども「大きな」の「な」は、ひろい、あかるい。あたゝかい。「大きき」をいふには、「大きい」よりは、「大きな」こそ、ミ思はれる。それが、終止法でない限り、「大きな木」の方が「大きい木」よりは、ふさはしからうかミ思はれる。

序ながら、これと同じく「小さい」ミ「小さな」についての私の近頃の不安もある。東京では、「い」よりは、「な」の方が、よく使はれる様である。私が、さる小學校の四年生について尋ねたら、

「ちひさい」は 女のこごばで、

ちひさな は、男のこごばだ」

ミいつた兒童があつた。これは、前述の

ア列の音ミ、

イ列の音ミの差

であるから、「小さい」の方が「小さな」よりは、狭くて、「小」をあらはすには、ふさはしいミ考へられるのである。しかしその音韻上の表現ミは離れて、

「大きい」ミ「大きな」、

「小さい」ミ「小さな」、

は、「い」ミ「な」ミの音の響のぎちらが、幼兒に、自然であるかの問題になる。由來、文壇の先輩、多くの文獻について見ても、かういふ場合には「い」の方が多い。一例ミして、女學用のある國文教科書の中に、島崎藤村氏の『小さい旅人』ミ題する一文が有つたのであるが、女生徒の幾人もが、朗讀に際しては、自然に、「小さな旅人」ミ讀んで困つた時から、注意

してゐる私の一の不安なのである。題目では

『小さい旅人』

と、明確に読んでから本文に入つても、本文中の、「小さい旅人」をば、多くが

「小さな旅人」

と読んで困つたのである。これは、小學校の國語讀本中でも度々有る事實であつて自然の音便ではあつても、これは、音楽上からは、大きい問題を提供してゐる。

〔結〕

一體、幼稚園向の、四大節の歌の如きも當局から、發表されてもよい頃である。この時、私共は、全國幾百萬の幼児、少くも幼稚園兒幾十萬の爲に、もつこくふさはしく、正しく、楽しい歌謡を、むきこくに、提供しなくてはならぬと感じてゐるのであるが、さしあたつて、自分の歌として、愛唱飽く事を知らないやうな自分の「幼稚園々歌」が日本中の幼稚園に、早く、制定せられんことを祈つてやまないことを、繰返しておく。

げに、ごこの幼稚園でも、窓の一つから、流れ込んで來る歌謡の多くは、何ぞ。流行歌の一節か、ジャズめいた小唄のいくさりか。否々、ごこかの幼稚園のレコードの中には、幼兒に、ふさはしからぬのみか、幼兒の耳を、心を損ねるかも知れないほどの俗惡な童謡レコードが、まじつてはるないかさへいつて見たい程の現状ではある。